

本屋に行くと、今月の新刊コーナーをざっと見ると、必ず新潮文庫の本棚を見に行く。僕は、特定の作家さんのファンというのではないので、面白そうだなと思ったら、何でも読むほうである。本のジャケ買い（表紙だけを見て本を買ったこと）、流れ買いとでもいうのかも知れないが、とにかく選択に脈絡がない。今回は、そんな流れで見つけた本の読書感想文である。

新潮文庫のコーナーで、平積みになった今月の新刊やら、書店のお薦めなんかをさっと見終えると、「まあ、今月はめばしいものはないな」と思って、帰るつとした矢先だった。偶然、他の出版社の文庫新刊が目にとまった。『底辺女子高生（幻冬舎文庫）』、文庫のオビには「青春のドツボな三年間のこと」と書いてある。「んっ、女子高生に底辺って？ 底辺って、三角形の面積を求めるときに使うあの言葉だよな。だいたい女子高生にドツボなんであるのか？ 矛盾してないか？」と妙な疑問が湧出したので、パラパラと本をめくって見た。直感というか、なんか自分に引掛かるものを感じた。作者は豊島ミホという人で、作者略歴を見ると、秋田県出身で、最近の話題作として『檸檬のころ』があると書いてあった。ちょうど閉店間際で、閉店を告げる変な音楽が流れ始めたので、慌てて文芸書のコーナーに行き、『檸檬のころ』を取って、『底辺女子高生』と合せて二冊を買った。『檸檬のころ』は、きつと女子高生が手にしていたら可愛い絵になるのだろうなあと思わせる、本当にかわいい装丁になっていた。

豊島ミホ著『檸檬のころ』は、ある女子高生を主人公として、中学から高校進学、そして卒業を迎えるまでの日々を描く青春小説である。設定は、地方の県立進学校で、雪の移ろいが季節の移ろいとして美しく描かれている。おそらくそんな雪のイメージは、彼女の出身地である秋田の雪に近いのである。そして『底辺女子高生』を合せて読むと、彼女の高校生時代の記憶が色濃く反映された作品なんだということがわかる。ただ僕は、作品に描かれる地方の県立進学校、女子高生の生活、そしてその視点と心情というものを、とても面白く感じた。そして高校生だった頃の自分を鮮やかに思い出した。そんな意味でもとても面白いと思えた作品だった。

時は一九八〇年代後半で、僕は愛媛の松山という地方の高校生だった。県立落ちが多く、かと言って進学校でもなく、おまけに女子などいない男子校だった（実は僕が入学した年から共学化したのだが、女子入学者は一ケタしかいなかった）。別に勉強に燃えるでもなく、運動に秀でるわけでもなく、なんとなく私立文系の大学に行くのかなという雰囲気しかないゆる〜い高校生だった。ただ当時は、何にもなかったなという印象が強い。テレビはN

HKを除くと、南海放送とその後に関局したテレビ愛媛の二局しかなかったし、ラジオもAMとFMで各一波しかなかった。もちろん携帯やネット、衛星放送やケーブルテレビなんて、まだ空想上の世界の頃の話である。だから情報源は、本か雑誌が主流だった。松山市内には規模の大きい書店がいくつかあって、紀伊國屋書店松山店・明屋（はるや）書店・丸三書店なんかは、いつも女子高生で賑わっていたことをよく覚えている。

のんびりしていたと言えば、確かにのんびりしていた時代だった。ただ時代は、激動を始めていた頃だった。バブルという史上最大の好景氣を迎え、東京一極集中が進み、そして都市と地方の格差が開き始めた頃だった。日本は、貿易立国としての栄華を極め、その貿易黒字の大きさから、アメリカからの厳しい批判を受けていた。その見返りとして、牛肉・オレンジの貿易自由化が要求されていた（当時、外国からの牛肉やオレンジの輸入は制限されていた）。当時の愛媛県は農業県、そして特にミカン単作に依存した農業構造だったので、オレンジ自由化に対する不安は、潜在的にもすごく大きいものがあつた。そんなことは地元ニュースで見聞きしていたが、自分にとってはあまり関心のないことだった。それよりも雑誌が伝える「トレンドイ、いま若者の時代にー」、「TOKYO」にしか気持ちはなかつた。「こんな所にはダメだ。おわつてる愛媛。東京行かねば」、そんな悲壯感に似た気分だった。ただそんなムードが出てきたのは、自分が高三になる一九八〇年代も終わりの頃で、それまでは中学生の延長のようなぼんやりした高校生だった。

最近のことはさっぱりわからないが、僕が高校生の頃は正規の授業が終わると、すぐに補習の時間となって、下校できるのは夕方五時ごろだった。ほとんど全員だったのでないかと思うが、みんなチャリ通学（自転車通学）で、下校になるとクラス全員が一団となって校門を出た。抜け道のような住宅地を集団で通り抜け、ダラダラ自転車で走っていると、途中に家があったり、違う方向に帰る奴が群れから別れ、段々に集団は小さくなってゆく。何かくだらないことを取り留めなく話していたのだと思う。アイドルの話やら、食べ物のこと、新聞配達バイトや、ラジオやテレビのこと、くだらないギャク。松山は、中心市街地におおよその高校が集まっているのだが、僕の通っていた高校は郊外の港の近くにあった。だから通学は、他の高校生とはいつも逆方向だった。正面からやってくる他校のチャリ通を見ると、「も遅いな」といつも思うことだった。

そんな退屈極まりない高校通学だったのだが、誰が言い出したのであろうか、ある楽しみを発見した。朝は晴れていて、夕方に雨が急に降り出すと、いいことがあるというのである。朝、晴れていると雨具の用意をせずに、自転車で高校に行く。しかし夕方に急に雨

が降り出すと、みんな雨に濡れながら、無理して自転車で帰宅する。すると市内から戻ってくる女子高生のブラが透けて見えるというのである。はじめは「そうだったかな？」と思ったのだが、意識するようになると、確かにそうだった。一団となった帰宅の自転車集団で、通り過ぎた後、「みたか!」、「おー」とか言って盛り上がった。僕は、そんな雨を「ブラ透けの雨」と呼び、なんて文学的な表現なんだとひとり悦に入っていた。そんなことが続けば、見られる方も気がつくのかもしれない。あるとき、「このケダモノ!」という目で睨まれた。「なんでオレを睨むんだよ、他の奴にしるよ」と思ったのだが、ともかく恐ろしいほどのニラミだった（まあ僕が最もエロ視線だったか、最も気が弱そうに見えたからなのかもしれないが）。ともかく史上最大の下品さ、世紀に残る最低な高校生だった。

帰宅するのは、いつも夕方六時過ぎだった。夕飯を食べて、ちょっとテレビ見て、宿題やって、フロ入って、ちょっと勉強して、音楽聞かラジオ聞か、そんな単調な毎日だった。その頃、コンビニというか夜間営業している店はほとんどなく、夜はやることなかった。ただ家が国道沿いにあったので、ちょっと遅くまでやっている本屋がすぐ近所にあった。それまで雑誌を定期的に読む習慣はなかったのだが、退屈のぎに立ち読みしている内に、月刊誌を定期的に買うようになっていた。最近はなくなってしまったが、アイドル雑誌と通常の週刊誌の中間の感じで、最新トレンド、硬いテーマから軟らかいテーマを取り混ぜた青年誌があった（最近に残っている雑誌だと、週刊プレイボーイかSPYが雰囲気として近い）。確かミスマガジン（講談社）を中心にしたグラビア誌だったのではないかと思う。

いま思うと不思議な編集方針の雑誌で、アイドルが薦める本の紹介コーナーというのがあった。当時は「本を読まない」とバカになる（もしくは本を読まない人はバカである）という今では想像することすら難しい神話（笑）があったのだが、そんな時代的な偏見を打破するために仕掛けられていたのかもしれない。僕は、そんな紹介コーナーの本を読むということはなかったが、ただ「女の子って、そーゆー本を読むというか、好きなんだな」と興味深く思った。実は、僕はその頃、そもそも本や小説を読む習慣がまったくなかった。それを変えることになったのは、ある年のミスマガジンの子が、雑誌インタビューで、本が好きで文学作品を話題にしていることが多かったからである。「ヤバイ、本読まない」とミスマガジンのような子にもてない」と必死に思った。その子は、確か地方の公立進学校の高校生だったが、そこをやめて転校し、デビューしたと書かれていた。それで「文学なら紀伊國屋」とよくわからない偏見で松山店に通い始めた、それがきっかけだった。

紀伊國屋書店松山店は、松山市駅近くの交差点角にあって、細長い商業ビルの書店である。最近も配架はあまり変わっていないと思うが、その頃もフロアごとに扱う本が決まっていた。細長い商業ビルなので、昇りのエスカレーターはあるのだが、降りはなく、帰りはエレベーターか、レジ横にある階段から出るようになっていた。ただエレベーターは一台しかなく、なかなかやってこないの、みんな帰りは階段を使う感じだった。手狭なスペースなので、普通に書棚が配置されているだけなのだが、通路が少し狭かった。

一階は新刊や雑誌のフロアで、二階が少女マンガやティーンズ文庫のフロアだった。エスカレーターで上の階に行くときに、ちらつと見る二階フロアは妙な熱気がある女子高生だらけだった。それを見るたびに「ありゃ、男の入れる雰囲気じゃないな」と思った。当時、男子高校生はみんな詰襟の学生服だったが、女子は高校ごとに制服が違ったので、制服を見ればどの高校かがすぐにわかった。「南高（県立松山南高校）、それと女子高が多いな」とそんな印象がよく残っている。文庫のコーナーは、上のフロアにあった。いつ行っても、ガラガラだった。参考書を買ったついでに、立ち寄っていたのだが、「何かええのないかなあ」と思案しながら、新潮文庫の本棚の前でウロウロしていた。タイトルを見たり、裏表紙の本の紹介などを脈絡なく読んでも、ピンと来るものがなく、いつも何も買わずにレジ横の階段から帰っていた。

ある夏の暑い日で、店内はよくクーラーの利いた涼しげな日だった。いつもは誰もいない新潮文庫のコーナーに、少し大きめの荷物を持った女子高生がいた。何かの本を熱心に読んでいた。「あれ珍しいなあ、いつも誰もいないのに」と思ったが、邪魔してはいけないと思うので、少し距離を取って本棚の前に立った。でもいつも自分ひとりしかない場所に、誰か他の人がいる、しかも女子高生というのは気が散ってしまい、本どころではなかった。制服を見ると、東高の生徒だった。東高、県立松山東高校、松山で最も優秀な県立進学校である。「さすが東高は違うなあ」と心底から感心した。

その子は、あまりにも熱心に立ち読みしていて、まるで本の世界に没頭しているかのような感じで、僕が同じコーナーにいることに気がついていないようだった。しばらくするとパタッと文庫を閉じたと思うと、急にレジの方に歩き始めた。まさか新潮文庫のコーナーに人がいるとは思わなかったのであろう、狭い通路で大きめの荷物が僕にちよつと当たった。そのとき始めて人がいるのに気がついたようで、動揺したように「すみません。すみません」と、うつむいたまま慌てて繰り返す。僕が「いや別に」と言うと、そこに居たのが男だったことに驚いたようで、ハッと顔をあげた。本よみ特有の焦点のボケた目で、

パチパチさせながら僕を見ていたが、しばらくすると、まったく知らない人であることに気がついて、ものすごく動揺しているのがわかった。

そのとき突然、その子が「こっ、この本もいいですね」と手にした文庫を振りながら、不思議なことを聞いてきた。僕は、あまりにも予期しない質問にポカーンとしていると、その子は急にかえったように「私、なにやってんだ」ばりに、急にうつむいて、また「すみません。本当にすみません」と消え入るように、レジの方へ小走りに向かっていった。自分でも何が起きているのか、さっぱり把握できなかった。その子がレジで会計を済ましている姿をポカーンと見続けていた。会計を終え、レジ横の階段から下りようとすると、なんだか僕のほうをちらつと振り返った。すると「見られている！」と再び動揺したと思うと同時に、階段出口に向かって小走りになった。ゴンと、荷物が激しく仕切り壁に当たって、何か足元が滑ったような音が聞こえた。

その子は、目元が涼しく、聡明な感じの子だった。はじめ「東高には、こんなキレイな子がいるんだな。いいなあ」と思ったが、小走りに去って、変なところに荷物をぶつけ、足が滑った音を聞いた後には、「それでも不思議ちゃんはいるんだな」と思った。その子は、本の裏表紙を前にして持っていた、しかも振り方があまりにも激しかったので、僕は作家もタイトルも何もわからなかった。「やっぱ本を読まない」と、キレイな子にもてない、あの直感確信に変わった。相変わらず読みたい本はなかったが、「松山なら漱石だ」ということで、新潮文庫の棚から夏目漱石の本を手に取り、あの子と同じようにレジへと向かった。それが僕が本を読むようになった習慣の始まり、そのものであった。

高三の秋、日本経済はバブル景気のピークに差しかかっていた。テレビや雑誌が伝える東京は、過熱気味の熱狂そのものだった。それでも愛媛では、毎日、自転車通学し、勉強して、帰って寝る、そんな単調な日々の連続だった。ただみんな少しづつではあったが、変わりつつあった。オシャレに気を使う奴は、自転車通学をやめ、電車通学になっていた。そんな車内で、彼女をゲットしたとか、どこまで進んだかとかが、毎朝話題になっていた。チャリ通組も、帰りの話題は「進学か就職か、県外か県内か」という話ばかりだった。自分の未来を決める選択の前に、みんな寡黙になりつつあった。もうブラ透けの雨など、すっかり忘れてしまっていた。僕は、ただ東京、ただ新潮文庫だった。

高校卒業の後には、きつと明るく、楽しいだけの未来があることを、疑うなんて想像することすらできなかった。『檸檬のころ』を読むと、そんな生々しい時がさーっと戻ってきた。秋田と愛媛というまったく縁もゆかりもない、時代も違う、そして男と女と違う。そ

れにもかかわらず、自己の記憶とイメージを引き出してくれる不思議な作家さんの登場だなと思った。これから他の作品も楽しみだなと思った。

東京に行ったのは、大成功だった。そして今でも笑えるが、本を読むとモテるというのは、まったくのお門違いだった。そんなことに気がつくには、少しの年月が必要だった。しかし気がついた頃には、本を読む習慣だけがきっちり残ってしまった。いまでも新潮文庫のコーナーに誰もいないと、安心して本を選べる。いや誰かいると、気がそぞろで本を選べない。昔、本を読むと、より深く人生を味わえると言っていた人がいた。残念ながら自分は、人生を味わうほどの余裕はない。青春小説など、うそ臭いと思っていた。一時期、文学などダメで、ノン・フィクションこそが本たる意義だと思ったこともあった。

文学冬の時代、それがまさにバブル好景気の頃だった。欲望や夢が叶えられる可能性を社会が示し続けることができる、そんなとき人々は文学を必要としないのであろう。その後、日本経済は大幅な景気後退と平成不況を迎え、社会は多くの人々に苦しみと悲しみを与える時代になった。そしてITというテクノロジーの革新も、便利になった反面、実は苦を与える簡易なツールの登場という側面を持つ。この数年は、文学の黄金時代である。ノン・フィクションは救いが無い、多くの人がそう感じるであろう。苦が溢れ、救いが求められる時に、文学は栄える、これは真理を持つある一面なのであろう。

本を読むと救われたり、感動したり、共感したり、泣いたり笑ったりするという。もちろん読書から得られるものは沢山あるのであろう。でも動機が不純で、いまでも脈絡のない読書をしている自分は、最近少し違った感想を持つようになった。出会いの楽しみ、それは他人が撮った自分の姿の写真を、偶然見る感覚に近いかもしれない。そしてその写真を見たときに感じる、他人の視点や自分の捉え方の意外さ新鮮さ、その場とその時代のライブ感覚、そんなことが混在して鮮明に蘇ってくる仕掛けといっても良いかもしれない。ノスタルジーという言い方があるが、それは懐古趣味ということではなく、それが自分に元気を与えてくれる、もしくは今の苦を少し耐えさせてくれる力を与える妙薬という理解でよいのではないかと思う。

豊島ミホさんのエッセイ集『底辺女子高生』に「もさもさ」という、秋田の雪にまつわるエッセイがある。そこに雪かきしながら、最も北でも雪のない愛媛に嫁ごう！と決心した話が出てくる（なぜ愛媛かは不明）。そんな秋田と愛媛というまったく縁のない二県がつながったりする意外なこともあるもので、そんなことも読書の楽しみかと思った。

（豊島ミホ『檸檬のころ』幻冬舎、二〇〇五年）